

日语

语感辞典

〔日〕
中村明
著

独家原版！

日语国语辞典、日汉辞典里没有的语感解释。
独一无二的语感辞典，日语学习、翻译必备！

世界图书出版公司

日语

语感辞典

〔日〕中村明
著



世界图书出版公司

北京·广州·上海·西安

图书在版编目 (CIP) 数据

日语语感辞典/(日)中村明著. --北京:世界图书出版公司北京公司, 2014. 2
ISBN 978-7-5100-5663-5

I. ①日… II. ①中… III. ①日语—词典 IV. ①H366
中国版本图书馆CIP数据核字(2013)第004991号

NIHONGO GOKAN NO JITEN

by Akira Nakamura

© 2010 by Akira Nakamura

Originally published 2010 by Iwanami Shoten, Publishers, Tokyo.

This mainland China edition published 2014

by Beijing World Publishing Corporation, Beijing

by arrangement with Iwanami Shoten, Publishers, Tokyo.

Cover design copyright © 2010 by Hiromasa Mori

本辞典原出版社为日本岩波书店。

日语语感辞典

著 者: [日] 中村明

责任编辑: 刘小芬

出 版: 世界图书出版公司北京公司

出 版 人: 张跃明

发 行: 世界图书出版公司北京公司

(地址: 北京朝内大街137号 邮编: 100010 电话: 010-64077922)

销 售: 各地新华书店和外文书店

印 刷: 北京博图彩色印刷有限公司

开 本: 787 mm × 1092 mm 1/32

印 张: 37.5

字 数: 1200千

版 次: 2014年7月第1版 2014年7月第1次印刷

ISBN 978-7-5100-5663-5

定 价: 92.00元

まえがき

表現選択の諸レベル

ことばが運ぶのは、伝えようとする情報だけではない。当人の意図とは関係なく、その事柄を選び、そんなふうに表示したその人自身の、立場や態度や評価や配慮、性別や年齢、感じ方や考え方、価値観や教養や品性を含めた人間性が相手に否応なく伝わってしまう。

ひとつの文章が生まれるまでには、無意識のうちに発想や表現のさまざまなレベルでの選択が積み重ねられる。その過程での人間の在り方が、結果として姿を現す言語作品に映っているからである。表現の外面から発想の内面へとそのレベルを順にたどってみよう。

もっとも浅いレベルは、あることばをどんな文字で記すかという選択だ。何の変哲もない「中村」も「ナカムラ」と書けば日系人めいて見えるし、「中むら」という看板は何やら料亭じみた雰囲気漂わせる。外来語は通常カタカナで書くが、慣用を破って「ふらんす」と書くとやわらかい感じになり、「仏蘭西料理」という看板を見ると何だか高級そうで財布

の中身が心配になる。「倫敦」や「巴里」という表記は昔懐かしい感じを誘う。「コーヒー」も「珈琲」と書くと、紙コップ入りのインスタントではイメージが合わない。逆に、「総理」も「ソーリ」では権威がた落ちになり、「芸術」も「ゲージツ」と書かれると鑑賞する気にもならない。「広島」も「ヒロシマ」と書いたとたんに被爆の連想が強くなり、「風俗」も「フゾク」と書けばいかかわしい響きが変わる。これらはいずれも、文字表記の選択が独特の語感をかもしだしている例である。

このような文字選びより少し深いレベルに、ことば選びがある。この用語選択にまた深淺のレベル差がある。伝達したい意味内容に関係なく、自分の品格や態度、相手への配慮に応じてことばを選ぶのは、表面に近い比較的浅いレベルだろう。「きょうは九月九日だ」と言えば、相手と膝を交えてしゃべるような親しい感じだが、「です」にすると、いくぶん改まって相手と少し距離を置いた感じになる。そこを「でございます」にすると、相手をさらに丁寧に扱った感じになり、大勢の人の前で礼儀正しく話しているような雰囲気が出る。そして、そこをもし「である」と結べば、話している感じは消え去り、不特定の読み手に向けた、硬い書きことばの、やや冷たい、きっぱりとした、堂々たる調子に変わる。

「あした」も「あす」も「明日あした」も、きょうの次の日をさす

点で基本的な意味はまったく同じだ。しかし、どんな場合にどれを使っても常にしっくり来るわけではない。「あした」は親しい人たちの間の日常会話でふつうに使われる、くだけた感じのことばだ。「あす」はそれより少し改まった感じがあり、家族や親友などのごく親しい人に向かって使うと、若干取り澄ました響きがあって水くさい印象を与えかねない。「明日」はさらに改まった感じが強く、格式ばった雰囲気になる。

「ふくらむ」と「ふくれる」も似たような意味だが、微妙な違いがあって、もう少し深いレベルの用語選択となる。「ふくれる」のほうがくだけた感じがいくらか強いことを別にして、も、「ふくらむ」が自然に起こる全体的な膨張をさすことが多いのに対し、「ふくれる」はやや不自然で部分的な膨張をさすことが多い。そのため、「ふくらむ」は正常な変化ということから好ましい連想が働きやすく、「ふくれる」は異常な変化を思わせて悪い連想と結びつきやすい。そのため、事実を伝えるだけの「予算がふくらむ」に比べ、「予算がふくれる」という表現はその膨張を好ましくないと考えているようなニュアンスがともなう。これもまた語感の違いではあるが、意味とからみあう面もあり、単なる同義語の選択として片づけるわけにはいかない。

自分の伝えたい意味合いを正確に表すのにもっとも適切な表現を探そう。正確なことばというのは、単に誤りを含んで

いないというだけでは不十分だ。「休憩」か「休息」かと迷ったとき、両方やめて「休み」という語で間に合わせれば、そんな微妙な意味の違いに悩まずに済む。「休み」には「休憩」も「休息」も含まれるから、たしかにそれでも間違いはない。が、「休み」は、その「休憩」と「休息」だけではなく「休暇」「休日」「休業」から「欠席」「欠勤」「欠場」までを含む広い意味のことばだ。そういう区別をせずに単に「休み」とするのは、松も樺も楓も桜も白樺も無差別に「木」で片づけ、小腸と大腸どころか胃も肝臓も脾臓も区別せずに「消化器」で間に合わせるような、そんな粗っぽさで現実を切り取ったことになる。

目的によってはそれで済む場合もあり、もっときめ細かく表すべき時もある。場面や文脈などに応じて、自分の感覚・感情・認識をどこまで細かくとらえ、それをどれほど忠実に伝えたいかという、その時その場の表現意図に的確に対応する表現を追い求める。

表現したい何かがはじめから明確なことはの形で存在することはめったにない。ほのぼのとした感情が胸に広がるように。「うれしい」ということばはしか頭に浮かばない人はためらわずにそう書く。「楽しい」ということばも頭に浮かぶ人はどちらが適切かを考え、好ましいことが起こったのを知った瞬間に始まる喜びであれば「うれしい」を選び、実際の行動

をとおして継続的に感じる満ち足りた快さであれば「楽しい」を選ぶはずだ。ある人はさらに「喜ばしい」「愉快だ」「痛快だ」といったことばを含めた中から最適の一語を探すだろう。同じ「喜び」であっても、その多様なあり方を「わく」「みながる」「こみあげる」「ほとばしる」と描き分ける。

ことばを選び、表現を練るのは、ことばをいじりまわすことではない。文章を飾って知識をひけらかすためでもない。表現しようとする対象のひだに分け入り、実際のイメージに接近しようとする努力なのだ。とすれば、人間がことばを選ぶとき、その奥にある表現すべき対象や現実のとらえ方をも同時に選んでいることになる。ものの見方や考え方をはっきりさせ、何を対象にどの面をどう描くかという選択をおし、その人自身が姿を現すのである。そういう人間の行動の反映として、表現は豊かな広がりを見せるのだろう。

ことばの「意味」と「語感」の関係

「医者」と「医師」、「勝手」と「台所」と「キッチン」、「ほん」と「めし」と「ライス」、「青年」と「若人」と「若者」、「女」と「女性」と「女子」、「結婚式」と「婚礼」と「祝言」、「尿」と「小便」と「おしっこ」と「小水」、「牧場」と「まきば」は、それぞれ似たようなものをさすが、ことばによって

みな感じが違う。各グループに共通する、そのことばが何をさすかという部分を「意味」と呼び、同じグループでも単語ごとに異なる、どんな感じのことばかという部分を「語感」と呼ぶ。

このような典型的な例では、意味と語感とが明確に区別できるように見える。しかし、実際の境界線はそう単純ではない。「ごはん」には茶碗、「めし」には丼、「ライス」には平たい皿のイメージがぴったりする。「女」は子供でも違和感がないうのに、「女性」は大人を、「女子」は比較的若い女性を連想させやすい。「工場」も「こうば」と読むと小規模で近代的な設備がそなわっていない雰囲気になる。「出身地」に比べ、「ふるさと」として懐かしく思い浮かべる地域は狭い。「いゆ」は「温泉」より違和感なく使える文脈の範囲が小さい。カメラに装填するものを「フィルム」、テレビで放映するものを「フィルム」と言い分ける人もある。こうして、ことばの感觸としての語感が、何をさすかという意味の領域にも微妙にからんでくる。

「大工」や「熱血教師」ということばを聞くと直感的に男を思い浮かべるが、女であっていけない道理はない。「あたし」や「かしら？」は男性でも使うのに、すぐ女性の話し手を想像してしまふ。常に女性をさし、あるいは、必ず女性が用い、男性をさしたり男性が用いたりすれば誤りだとまで判断でき

れば「意味」の問題だが、「主として」「多くは」「傾向がある」「どちらかといえば」といった段階では「語感」の域を出ない。「どちらかといえは」から「必ず」までの間はほとんど連続的で、現実には微妙な場合が少なくない。そのため、語感を中心とするこの辞典では、そういう境界線上の微妙な意味の違いにも積極的に言及した。

表現対象の性質や場面の状況や自身の気持ちなどを総合判断して、話し手や書き手は最適の表現を心がける。その際、事柄寄りの深いレベルでの表現選択が甘いと、何のどの側面を取り上げ、どこに重点を置いて述べているかが不明確になる。ことば寄りの浅いレベルでの表現選択が甘いと、その内容に対する当人の気持ち、あるいは聞き手や読み手に対する態度が曖昧になる。一方、派手な技巧が目立たないのにどこか勘の利いたスピーチや文章というものがある。それは右に述べた各レベルでの選択が的確におこなわれ、均衡のとれた表現感覚が言語作品の隅々まで通っているのである。適切という一事を離れて、万能のすぐれた表現などというものは存在しない。

言語感覚の鋭い人は、適切な表現を的確に判断し、きっぱりと最適の一語をしぼりきる。最適の一語にたどりつく道筋は二つある。一方で「意味」の面から、「人類」「人間」「人」「人物」「人材」「宵」「晩」「夜」「本降り」「大降り」「土砂

降り」「ざあざあ降り」といった語のそれぞれの違いを明確に識別し、「ふれる」と「さわる」、「ふくらむ」と「ふくれる」の微妙なずれを見分ける。と同時に、他方で「語感」の面から、「夕方」「夕刻」「夕暮れ」「夕間暮れ」「日暮れ」「たそがれ」、「妻」「家内」「細君」「かみさん」「ワイフ」「家の者」といった同義語群からそれぞれの感覚の差を感じとって使い分ける。職人の芸だ。

本書の特色と使い方

こうして最適の一語をめざして候補をしぼりこむ過程で迷ったときに、「意味」を調べる国語辞典は数多く出ているが、「語感」を探る手がかりとなる専門辞典は存在しなかった。微妙なニュアンスはとらえにくく、また、ことばで説明しがたく、どうしても感覺的・主観的になりやすいからだろう。しかし、「意味」と「語感」の一方の知識が欠落していても最適の一語にたどりつけない。そこで、欠落している半面の「語感」についてその実態を探るため、大胆にも辞書の姿でそれに果敢に挑んでみたのが本書である。

そのため、この辞典の主たる内容は、「教師」と「教員」と「先生」、「未婚の母」と「シングルマザー」、「ピザ」と「ピッツァ」、「叱る」と「怒る」、「永久」と「永遠」、「素っ裸」と

「真っ裸」のように、意味が似ていてどのように使い分けるか紛らわしい類義語の組み合わせを中心に、「大丈夫」「普通に」「こたわる」「鳥肌が立つ」「おもむろに」「わくわく」のように近年その用法に変化の生じた問題のことはなどを含めて幅広く約一万語を取り上げ、各語の使用領域を規定し、具体例とともにそれぞれの感触や連想の違いなどを分析し、さらに意味・用法の微妙な差に言及するという踏み込んだ解説となっている。

以下、項目解説の順を追って具体的に収載情報と利用方法を説明しよう。

① 見出し語の次に、漢字を用いる場合の表記形を、【慌(周章/狼狽)てる】や【陰影(翳)】のように示した。それによって、漢字で書く場合の、現代における標準的な用字を知り、その他の表記や当て字、本来の用字などのバリエーションがわかる。

② 次に、「薄い」には「厚み・色・味・密度・濃度・可能性」などが少ない意、「絵」には「対象の姿かたちやようすなどを線や色で平面上に視覚的に表現したもの」、「大っぴら」には「通常なら隠すことをあからさまにする意」というふうな語義を簡潔に示した。その語の意味を明確にするとともに、同じ単語でも意味・用法によって語感が違うことが

あるため、ここではどのような場合の語感を問題にしているかが明白になる。

③ 次に、「相手」や「厚い」には「くだけた会話から硬い文章まで幅広く使われる日常の基本的な和語」、「勤しむ」には「主として文章中に用いられる、やや古風な和語」、「うずうず」には「主に会話に使われる感覚的な和語表現」、「永劫」には「仏教的・哲学的な雰囲気をもつ硬い漢語の文章語」、「えにし」には「古めかしい文学的な文章にまれに用いられる、古語に近い雅やかな和語」、「幼子」には「主として文章に用いられる古風で美化した感じの和語」、「おセンチ」には「主に女性がくだけた会話に使った古めかしいことば」、「自署」には「法律関係の文章などに用いられる専門的な漢語」というふうに、和語か漢語か外来語かというそのことばの語種、俗語か口頭語か文章語か雅語かといった文体的なレベル、専門語か一般語か、幼児語か女性語か方言か、丁寧かぞんざいかななどを示し、古風、詩的、美化といった感じを添えた。これによって、その語をどのような場合にどのような感じで使うとしくり来るかがわかる。

④ 次に、「犯す」には「過ちを―」「罪を―」「女性を―」「―しがたい気品」、「侵す」には「国境を―」「権利を―」「表現の自由を―」「―べからざる権限」、「冒す」には「危

険を―)〈風雨を―して強行する〉(病に―される)を並べ、また、「押さえる」には〈腕を―〉(犯人を―)〈物件を―〉(証拠を―)〈力で―〉、「抑える」には〈欲望を―〉(感情を―)〈出費を―〉(値段を―)〈―えた色調〉を列挙するなど、簡潔な使用例を豊富に掲げること、慣用的な用法が自然に浮かび上がり、漢字の違いによる使い分けの勘どころがつかめるように配慮した。

⑤ さらに、「愛くるしい」には「類義の「愛らしい」よりも幼児性を強く感じさせ、赤ん坊か幼い子供について、特に性別を意識せずに使う傾向がある」、「いきなり」には「通常の過程を経ないで、という省略に対する驚きを感じられる」、「失う」には「事故」「火事」「戦争」「失敗」「無駄」などのように減少することが望ましい対象については「無くす」を用い、この「失う」は使えない、「英雄」には「通常は男性をさす。「雄」とあることもあり、女性を連想しにくい」、「教える」には「客観的・中立的な「知らせる」と違って、伝達する側が上位の、あるいは優位な立場にあり、相手のために行動を起こす」という感じが強い。そのため、単なる情報伝達というよりそのことをとおして指導する雰囲気漂い、相手は恩義に感じる」といった補足的説明を注記し、その語の適切な使用に役立つさまざまな情報を提供した。

⑥ 参考資料としてもう一つ、その語の意味用法や特に語感を深く味わい取るために、文学作品に出てくる生きた実例を添えた。このたび新たに採集した用例のほか、すでに公刊した著書『感情表現辞典』『感覚表現辞典』『日本語の文体・レトリック辞典』(いずれも東京堂出版)、『名文』『現代名文案内』『人物表現辞典』『笑いの日本語事典』(いずれも筑摩書房)、『比喻表現辞典』『手で書き写したい名文』(ともに角川書店)、『日本語レトリックの体系』『日本語の文体』『文章読本笑いのセンス』『文の彩り』(いずれも岩波書店)などの著書に引用した例を再掲した。一部、国語辞典類をヒントに原典にさかのぼってたどりついた例を補充した項目もある。この実例の選択にあたっては、そのことばの語感がよくにじみ出ていてわかりやすい箇所を中心として採集したが、そこに注目すべき内容が語られていたり興味深い言及があったりして選んだ例もある。夏目漱石・森鷗外・芥川龍之介・志賀直哉・谷崎潤一郎・川端康成から藤沢周平・村上春樹・川上弘美・小川洋子に至る近代・現代の数多くの作家の手になる大量の実例を収録できたのは、この辞典の宝である。

⑦ 著者が『小津の魔法つかい』(明治書院)を執筆する際に小津安二郎・野田高梧の共同シナリオを熟読玩味した経験を活用し、小津監督の映画から多数の用例を引用・紹介した。

これは日本語が凜としていた時代の話しことばの響きを今に伝える。

⑧ 雑誌の作家訪問の企画その他で、武者小路実篤・堀口大
学・里見弴・瀧井孝作・井伏鱒二・尾崎一雄・網野菊・小
林秀雄・永井龍男・円地文子・田宮虎彦・大岡昇平・小島
信夫・小沼丹・吉行淳之介・庄野潤三ら多くの作家から、
実作の現場での生の声を聞くことができた。この得がたい
体験を生かし、本書のそこそこに、作家自身から直接聞い
た言語意識や表現感覚に関する貴重な発言を紹介した。イ
ンタビューの詳細は『作家の文体』（ちくま学芸文庫）としてま
とめた対談記録とその解説を参照されたい。

⑨ 各項目の末尾に、意味の似た語群を列挙し、特に関連の
深い項目に印を付した。互いに参照することによって類義
語辞典の役を兼ね、それぞれの語感の違いや微妙な意味合
いの差を感じとるヒントが得られる。

⑩ 以上のように、本書は、最適の一語を探すプロセスで、
ことばの「意味」を説明する国語辞典では解決できない部
分、すなわち「語感」を知る目的で引くための辞典である。
と同時に、思い思いにページを繰りながら⑥⑦⑧の特色を

楽しむ本でもある。楽しんでいるうちに無性に本が読みた
くなるかもしれない。知らず知らず言語感覚が鍛えられ、
いつか日本語を味わう喜びにひたることになれば理想的で
ある。

筑摩書房の雑誌『言語生活』の一九八〇年五月号に「語感
とイメージ」と題する座談会が載っている。大岡信さんが「生
きざま」ということばの語感を嫌い、谷川俊太郎さんが「し
なやか」という語に含まれる勁ツツミさが理解できなくなった時代
を嘆き、辻邦生さんが小都市を意味するときは「街」でも
「町」でもしっくりせず「都市」と表記すると実作者の繊細な
表現感覚を吐露した。司会者としてその現場に居合わせ、語
感についてともに語り合ったあの日から三十年、それをきっ
かけに折々考えてきた多彩な語感のヒントを集成したこの
辞典が、多くの読者にとって日本語の表現の勘をみがく刺激
になればと願う。

二〇一〇年一〇月

著者

凡 例

一 収録したことは

1 本辞典には日常の言語生活で広く使われることばの中から、同じ事柄をさす類義語の使い分けや特に語感の解説が必要と思われる語を中心として選択し、連語や成句も含め、古風な雅語から近年用いられる俗語まで約一万を収録した。

2 見出し語は原則として一単語のものとしたが、日常の言語生活でまとめてよく使われる、単語が慣用的に結びついたことばもそのまま見出し語として採用し、「愛」「明るい」「会う」などのほか、「全力投球」「ペーパードライバー」のような複合語や、必要に応じ「所帯を持つ」「露と消える」などの連語や慣用句も、通常の見出し語として掲げてある。

二 見出し

1 見出し語は原則として平仮名を用い、現代仮名遣いで示した。

2 外来語は片仮名で示し、長音は「ー」を用いた。

メリケンコ【メリケン粉】 ゴージャス

3 表記形態によって語感の異なるものは別項目として扱った。

フィルム フィルム

コンピュータ コンピューター

4 見出し語はすべて独立項目とし、その見出し語を含む複合語を一項目の中に追いつく方法は採らなかった。見出し語・表記形が同一の語で、著しく異なる語義が複数あるものは、同一見出しの中で語義ごとに①②…として解説し、それぞれの類義語を掲げた。さらに細かく⑦⑧…として分類した項目もある。また、同語であっても意味により表記形が異なる場合は原則として別項目とした。

5 見出し語、表記形の後に矢印(↓)で示し、解説を他の項目に委ねたものもある。

こくかん【酷寒】↓こっかん

6 見出し語の配列は五十音順とした。

・同じ仮名の語は、清音・濁音・半濁音の順に並べ、拗音(きゃ・きゅ・きょ、など)や促音(っ)、外来語に用いる小さい仮名の表記(ファ・ティ、など)は普通の大きさで表す直音の後ろに置き、平仮名・片仮名の順とした。

きょうし【教師】 きょうじ【矜持】 ぎょうし【擬

【視】ぎょうじ【行事】

いりよう【入り用】いりよう【衣料】

かつて【嘗て】かつて【勝手】

ふあん【不安】ファン ファン

・見出し語が同一の場合は、活用語の動詞・形容詞を先に掲げ、次いで表記形の記載がない項目、表記形の文字数が少ない項目の順とした。

こい【濃い】こい【恋】こい【故意】

・長音(ー)は直前の仮名の母音として配列した。(「ケータリング」は「ケエタリング」の位置となる)

三 表記形

1 【】の中に、その語の書き表し方を示した。ただし、表記形が見出し語の仮名と全く同じ場合は省略した。

2 【】内の表記形は、常用漢字を主体とする現代の標準的な表記を第一に挙げたが、現在通行の他の表記や文学作品などに頻出する表記も並べて挙げ、() / () を用いて以下の通り示した。

ア () 内には、第一の表記に準じて用いられる漢字を

挙げ、複数ある場合には「・」を用いて併記した。なお、

() 内は直前の一文字に対応した表記を原則としたが、簡略を旨として誤解のない範囲で複数の文字に対

応させたものもある。

なかみ【中身(味)】 || 中身、中味 (上記二種の表記が通行であることを示す、以下同様)

いつわり【偽(詐・佯)り】 || 偽り、詐り、佯り

ひざし【日(陽)差(射)し】 || 日差し、日射し、陽差し、陽射し

あいぎ【合(い)着(間)着】 || 合(い)着、間着

うすのろ【薄(鈍)野(呂)】 || 薄鈍、薄野呂

みえ【見(え)栄】 || 見え、見栄

ていねい【丁(寧)叮(嚙)】 || 丁寧、叮嚀

イ / で区切ったものは、同格に用いられる表記を示し、当て字なども含め、文字遣いが異なるタイプであるものを示した。

あいびき【逢(引)搦(曳)】 おっと【夫(良)人】

ことば【言葉(詞)】

ウ こだま【木(霊)(魂)(精) / 笈】 || 木霊、木魂、木精、笈

ウ () 内には、現在の「常用漢字表」に掲げられた漢字に対応して、旧字とされている正字体の中で、本来は別字であるものや、略体を新字体として採用したため対応する旧字が一樣でないもの、誤って混用されているものなどのうち、現在でも用いられている旧字(本来の字体)を参考のため掲げた。

げいのう【芸(藝)能】 とうか【灯(燈)火】

やかん【葉缶(罐)】 たべん【多弁(辯)】

べんべつ【弁(辨)別】

3 送り仮名は、内閣告示「送り仮名の付け方」を参考と
したうえで、省くことのできる送り仮名まで付けること
を原則としたが、両方を掲げたものもある。

うかぶ【浮かぶ】 くらす【暮らす】

おどり【踊り】 こたえ【答え】

とどけ【届(届け)】

4 外来語で、表記にローマ字(アルファベット)を用いる
のが普通である場合はその形で示した。

エスピー【SP】

5 表記形の表示に際しては原則として繰り返し符号「々」
などを用いずに文字を重ねる形で表したが、見出し語が
本来漢字一文字に対する読みであるにもかかわらず、文
字を重ねた表記も横行しているもの(「々」)を用い
た。

しょうしょう【少少】 たびたび【度度】

ますます【益益/益】 (見出し語が漢字一文字にも二文

字にも対応する場合の表記)

おのおの【各(各々)】 しばしば【屢(屢々)】 (本来

一文字に対応する場合の表記)

四 解説

見出し語、表記形のあとに、(1)語義、言語表現の場面
など、(2)用例、(3)語感や用法に関する注記や文学作
品の用例、その他の参考情報など、を掲げた。

1 語義はそこで扱う語感に則した簡潔な記述を心掛け
た。言語表現の使われ方の情報は、口頭語か文章語か、
日常語か専門語か、語種は、和語か漢語か外来語かなど
を明記し、混種語等については省略した。外来語は言語
名にも言及したが、英語については省略した。

語種の別については、古く中国から伝わった狭義の
「漢語」のほか、和製漢語などを含む字音語全体を広義の
「漢語」として表示し、和語・漢語・外来語の複合した
「混種語」や、連語や句のような長い単位には、原則とし
て「語」または「表現」と記した。

2 用例はへでくり、典型的な例のほか、語感のイ
メージを反映させた比較的長いものを多数掲げた。

ア 見出し語の部分を「一」に置き換え、活用語(動詞・
形容詞)の見出し語と異なる活用形は、語幹相当部分を
「一」で示し、活用語尾は文字にして表した。

イ 語幹と語尾の区別のない活用語や動詞から転じた名
詞、活用語の語幹に「さ」「げ」「み」「がる」などの付
いた派生語を用いる場合は、そのまま文字で表

した。

ウ 漢字の使い分けを示す場合は文字で表した。

きにいる【気に入る】：「　った店」〈これなら

きつとーよ〉〈お気に入りの相手〉

にる【似る】：〈子供が親にー〉〈似た者夫婦〉〈服

装も鞆もよく似ている〉

やるせない【遣る瀬無い】：「　思い」〈日ごとにや

るせなさが募る〉

べし【可し】：〈後世恐るー〉〈驚くべき事実〉〈立

ち入るべからず〉

こす【越す／超す】：〈冬を越す〉〈山を二つ越した

その先にある〉〈出費は二万円をはるかに超す〉

〈身長一九〇センチを超す大男〉

3

語感や用法に関する注記や文学作品の事例、その他の参考情報などを②(ペンマーク)以下に解説した。

ア 文学作品を出典とする事例は、作者名、『』でく

くった作品名や詩題、「　」でくくった引用文の順で掲

げた。引用文中の見出し語の掲げ方は「　」で示した

用例と同様にした。引用文中では適宜省略をし、「　」

を用いて内容の補足を試みた。

五 類義語グループ

1 項目の最後に一連の類義語を④(太矢印)以下に掲げ

た。相互に参照して語感の違いを確認していただき

たい。また、理解を深めるために、特に読み比べていた

きたい語にはQ(ルーベマーク)を付してある。

2 類義語は五十音順に並べた。表記はわかりやすさを優

先しており、その項目の表記形と一致しない場合もある。

イ 出典の書名・引用文とも原則として、新字体・現代

(新)仮名遣いで記述したが、詩などの韻文は歴史的

(旧)仮名遣いのままにしたものもある。また「　」印

は原典における改行を示す。

ウ 振りがなは全般的に読みにくいものに付してある

が、出典引用では控えめに示した。これは、文庫版な

どでは、便宜上振りがなを推定して付してあるものが

多いが、原典の作者の意図した読み方は正確にはわか

らないものがあるからである。

エ 解説のなかで、見出し語を含む語句を示す場合も

「　」を用い、掲げ方は用例と同様にした。

あ

アート「芸術」の意で会話や軽い文章に使われる新しい感じの外来語。〈モダン〉〈ポップ〉〈ディレクター〉
「芸術」に比べて軽く斬新な語感で用いられ、ペーター・ベン・ミケランジェロ・北斎などのクラシック作品とはイメージが合わない。文学は含まず、「現代」の中に音楽も含まれない傾向が強い。↳芸術

あい【愛】相手をいとしく思い大切に慈しむ気持ちさをさし、会話にも文章にも広く使われる基本的な漢語。〈母性〉
「を打ち明ける」〈の結晶〉〈親の―に飢える〉
井上靖の『狐銃』に「―というものは、太陽のように明るく、輝かしく、神にも人にも、永遠に祝福されるべきもの」とある。
「恋」や「恋愛」が男女間に限られるのに対し、この語は色恋に限らず、親子の間の愛、兄弟愛、隣人愛、人類愛から、万物への博愛、郷土愛、愛国心、神の愛まで、さまざまな形の愛情を表すのに用いられている。恥じらいを知る日本人はこのようなあからさまな語を人前で発することを伝統的に照れてきた。↳Q恋・恋愛

あいかた【相方】二人で組んでやるときの相手をさし、会話にも文章にも使われる、いくぶん古風な和語。〈漫才の―をつとめる〉
客の相手をする遊女をさす用法では古めかしい感じになる。↳相手・Q相棒・パートナー

あいかわらず【相変わらず】いつもと同じようにの意で、会

話やさほど硬くない文章に使われる和語表現。〈―独身だ〉
〈―元気に飛びまわっている〉
〈―安月給でこき使われている〉
〈―みごとな腕前だ〉
いい意味でも悪い意味でも使うが、自然・当然な状態について「あなたは―お元気ですか」などと尋ねるのは日本語として不自然。↳依然

あいかん【哀感】もの悲しい気分をさし、主に文章中に用いられる漢語。〈―が漂う〉〈―を催す〉〈―をそそる〉
松本清張は『或る「小倉日記」伝』で、かほそく消える鈴の音が「子供心に甘い―を誘った」と書いている。↳Q哀愁・悲哀・物悲しい・憂愁

あいぎ【合い着(間着)】寒い冬と暑い夏との間の季節、春や秋に着る衣服の意で、会話にも文章にも使われる和語。〈温暖な日が続き、春物の―に替える〉
和服も洋服も含まれる。まれに、上着と下着の間に着る衣類をさす場合もある。↳合い服

あいきょう【愛嬌(敬)】顔つきやしぐさなどに自然な親しみやかかわいらしさの感じられる場合に、会話にも文章にも使われる漢語。〈―者〉〈―がある〉〈―がこぼれる〉
〈―をふりまく〉
意識的な「愛想」に比べ、その人間に具わったものをさし、徳永直の『太陽のない街』に「道化師のように―のある医師」とあるが、多く女性の態度について用いる傾向が強い。ただし、「男は度胸、女は―」という区別は感覚の古さを印象づける。↳あいそ・愛想

あいくち【匕首】つばのない短刀をさし、会話でも文章でも使う、やや古い連想のある和語。〈隠し持った―で切りつける〉
梶井基次郎の『冬の日』に「突然―のような悲しみが

心に触れた」という比喩表現が出る。刀身の長さから俗に「九寸五分（きん）」ともいう。「短刀」などに比べ、どこか犯罪の雰囲気がおう。↓懐剣：こがたな・小刀・短剣・Q短刀・どす・ふところがたな・脇差

あいくるしい【愛くるしい】容姿やしぐさがあどけなくかわいいで、やや改まった会話やさほど硬くない文章などで用いられる、やや古風なことば。へーしぐさへ見るからに顔立ちへ水上勉の『越前竹人形』に「丸顔のほっぺちりとした顔だ」とある。類義の「愛らしい」よりも幼児性を強く感じさせ、赤ん坊か幼い子供について、特に性別を意識せずを使う傾向がある。↓Q愛らしい・可愛い

あいこう【愛好】物事を好き好む意で、改まった会話や文章に用いられる硬い感じの漢語。へ印象派の絵画をーするへクラシック音楽をーするへ「好き」や「好む」と違って、対象はもっぱら物事であり、通常、人や品物などには用いられないから、いくら「愛し」ていて「好き」であっても、うっかり恋人にこの語を使ったら陰悪な空気になりかねない。↓Q好む・好き

あいさつ【挨拶】出会いや別れの際に互いに交わす社会的儀礼としての慣習的な動作や短いことばの意で、くだけた会話から硬い文章まで幅広く使われる日常の基本的な漢語。へ状へ時候のーへ転勤のーへ丁寧のーを交わすへ軽く手を上げてーするへ夏目漱石の『坊っちゃん』に「義理一遍のー」とある。「季節のーを欠かさない」「お礼のーに伺う」のように、敬意や感謝の意を表す行為の意にも、「来賓のー」「結婚披露宴でーに立つ」のように、公的な場での

儀礼上のスピーチの意にも用いる。小沼丹は「黒と白の猫」で「ー無しに死ぬから困ります」と、妻の急死に慟哭（むげう）する心を呆れるほどのんびりと描いてみせた。↓Q会釈・お辞儀・敬礼・最敬礼・自礼・黙礼・礼②

あいじやく【愛着（著）】「あいちゃく」の古めかしい表現。へ深いーを覚えるへもと仏教語で、世間の欲にとらわれて思いを断ち切れない意。「執着」と同様、「じやく」と読むと相当の高齢者と思われやすい。↓Qあいちゃく・しゅうじやく

あいしゅう【哀愁】わけもなく心にしみてくるうら寂しい感じをさし、改まった会話や文章に用いられる、いくぶん趣のある漢語。へ一抹のーへを帯びたメロディーへを帯びた節まわしへを誘う情景へ川端康成の『名人』に「生きて眠るように閉じた臉の線に、深いーがこもった」とある。↓Q哀感・うら悲しい・憂い・愁い・寂しい・寂寞（じやく）・寂寥（じやく）・物悲しい・憂愁

あいしよう【愛称】親しみをこめた呼び名をさし、会話にも文章にも使われる漢語。へで親しまれているへ「新商品のーを募る」のように、人間以外にも用いる。軽蔑のニュアンスがあれば使わない。↓あざなあだなQニックネーム
あいじよう【愛情】特に親子や恋人・夫婦の間で相手をいとおしみ大切にしようと思う気持ちをさして、やや改まった会話や文章に用いられる漢語。へ深いーへを抱くへを注ぐへを寄せるへにほだされるへのもつれへ室生犀星の『杏っ子』に「女の人の心にはいつもピアノのような音色がある。（略）だってピアノが鳴るようなもの」と

ある。「愛」ほど気障な響きは感じない。♡情愛

あいじん【愛人】 世間をはばかりる恋愛関係の異性をさす形式的な婉曲^{まごころ}表現。社会の良識に反するとして非難の対象になる「情夫」「情婦」「情人」「いろ」といった露骨な表現を避け、上位概念に置き換えて関係をほかすことで抽象化し、下品な感じを薄めた漢語。〈―関係にある〉〈―にする〉〈―を持つ〉。◎井伏鱒二が『鯉』で「君の―の家では泉水が広いようだが、鯉をあずかってくれなにかね?」「青木の―に手紙を送った」「青木の霊魂が彼の―を誤解してはいけない」というふうには「愛人」という語を単なる「恋人」という意味で用いているように、この語はもともと、恋愛関係にある異性一般をさしたが、現在では、陰湿でなくむしろ明るく健康的な語感を持つ「恋人」という語とは区別して使われる。太宰治の『斜陽』にある「私は将来、そのお方の―として暮すつもりだ」という箇所はそのような例である。現在は、正式の夫や妻以外にひそかに関係を持っている相手として、人前に出しにくい存在を連想させるが、そういう認識を示すだけで、それに対する軽蔑の気持ちまでは表明していない。♫いい人・Qいゝ恋人・情人・情夫・情婦

あいず【合図】 あらかじめ約束した方法で一定の情報を知らせる意で、くだけた会話から硬い文章まで幅広く使われる日常語。〈―を送る〉〈目で―する〉〈笛を―に始める〉♫サイン◎Qシグナル・信号

あいする【愛する】 大切に思う相手に愛情を注ぐ意で、会話より文章に使われる表現。〈心から―〉〈死ぬほど―〉〈―わが子の寝顔〉◎高橋和巳の『悲の器』に「無限の感情を以

てわが娘を―・していた」とある。小説やドラマなどに「あたしのこと、今でも―・してる?」「ああ、―・してるよ」といったやりとりが出てくるが、この語をくだけた会話で使うと気障^{まごころ}で浮ついた感じに響く。また、「―犬」「わが―町」「音楽を―」のように人間以外の対象にも用いるが、その用法では気障な感じが目立たない。♫Q恋する・暮う・好く憶まれる

あいせき【愛惜】 大切に思い手放したくない気持ちをさし、改まった会話や文章に用いられる漢語。〈―の品〉〈―の念〉◎永井荷風の『日和下駄』に「―の情はおのずから人をしてこの堀に艸遇花の馥郁とした昔を思わしめる」とある。♫未練

あいそ【愛想】 「あいそう」の意で会話や軽い文章に使われる漢語。〈―笑い〉〈―がない〉◎日常会話では「あいそう」よりもよく使う。「―を尽かす」「―もこそも尽き果てる」の形で、呆れて見限る意を表す場合は特にこの形が一般的。主に「お―を言う」の形で「おせじ」を意味する用法もある。♡愛嬌・Qあいそう

あいそう【愛想】 相手に好感を与える表情・態度・応対などをさし、会話にも文章にも使われる漢語。〈―笑い〉〈―の悪い店員〉〈―を言う〉◎太宰治の『人間失格』に「皆に―がいいかわりに、「友情」というものを、いちども実感した事が無く」とある。自然に具わった感じの「愛嬌」に比べ、相手をいい気分させたり相手に取り入ったりするために意図的にとることが多い。「無愛想」と対立。♫Q愛嬌・あいそ

あいだ【間】 二つの物体や時刻に挟まれている部分や、連続